

## 長 生 橋

ちょうせいばし

信濃川は、長野県と新潟県を流れるわが国を代表する河川のひとつである。源を埼玉（武州）・山梨（甲州）・長野（信州）の3県の境にそびえる甲武信岳（2,483m）に発し、上流は千曲川とよばれる。長野市で日本アルプスの槍が岳（3,180m）を水源とする犀川と合流した千曲川は、さらに北に流れ、新潟県に入ると、信濃川と名前を変える。川口町で魚野川と合流し、川幅を広げて大河川となって、小千谷市、長岡市を流れる。

長生橋は、新潟県長岡市の市街地の西側を流れる信濃川に架かる。橋名には、長岡市の「長」と草生津の「生」をとり、いつまでも「長く生きていて欲しい」との願いが込められている。

この橋の歴史は、明治10年（1877）信濃川の中州をはきんで長短二つの木橋が架けられたことから始まる。当時、橋の姿が巨大な龍が臥しているように見えたので、「臥龍橋」と呼ばれていた。

信濃川の氾濫でこの木橋はたびたび流され、そのつど架け替えられたが、昭和9年（1934）10月、橋長850.8m、幅員7.0mを有する鋼橋が架設された。基礎にはケーソン基礎、橋の形式は、カンチレバートラスである。橋の支間中央部のトラス高さは7.0m、橋脚上では13.5mとトラス高を高くして全体を力強い形にしている。東京の羽田空港近くの多摩川に架かる大師橋（No.106）と同種の形式である。

長生橋は架橋以来今日まで60余年もの間、昭和51年のコンクリート床版打ち替えなど補修を重ねながら、多くの交通を支えて、市民から親しまれてきた。とりわけ、毎年8月に催される長岡祭りのとき、打ち上げられる花火によって、くっきりと映し出される長生橋の姿は美しい。今では、信濃川の川原で多くの人びとが花火見物をする観光の名所になっている。

信濃川は長岡市からさらに流下して、<sup>ぶんすい</sup>分水町に至ると、大正11年（1922）に完成した大河津分水路と信濃川とに分流する。洪水時には、分水路を通じて信濃川の洪水量は、直接日本海へと流れる。

平常時は洗堰から新潟県の穀倉地帯をうるおし、新潟市の中心を流れ日本海に至る。河口近くでは新潟市のシンボルになっている万代橋の美しい姿を、信濃川の川面に映し出す。ちなみに、新潟地震にもよく耐えた現在の万代橋は、明治19年（1886）に初代の橋が架けられてから、三代目にあたる。〔HI〕

竣工年月：昭和9年（1934）10月

所在地：新潟県長岡市

河川名：信濃川

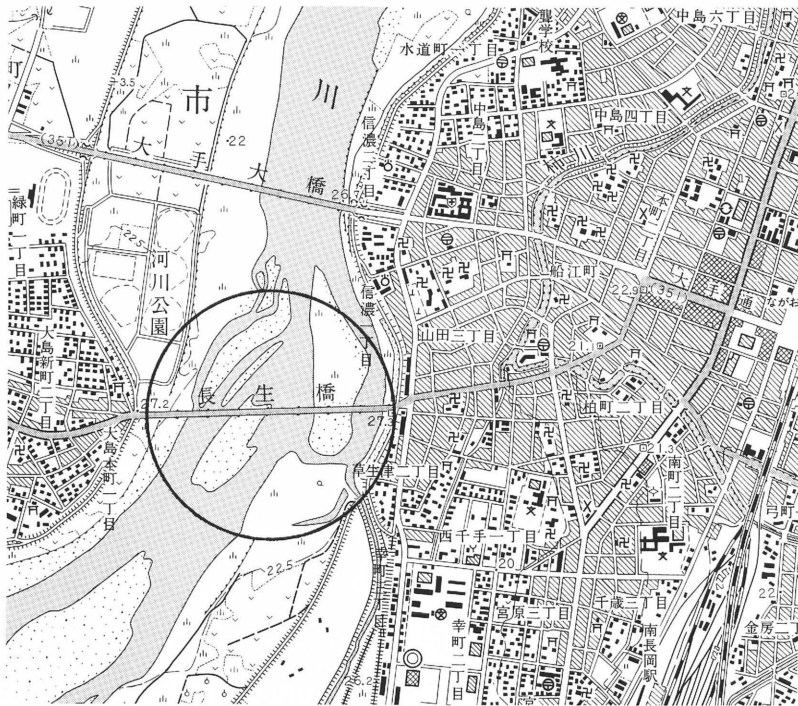
橋長・幅員：850.8m×7.0m

径間数・支間長：13×65.0m

形 式：下路カンチレバートラス



〈1992年9月16日，撮影・共に田島二郎〉



(1:25,000 長岡)



吊径間のヒンジ部構造